様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年５月３１日現在

機関番号：14301
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2009～2012
課題番号：21730620
研究課題名（和文）　パフォーマンス課題の効果的活用に関する国際比較調査

研究課題名（英文）　International Comparative Study on the Effective Application of Performance Tasks

研究代表者
西岡　加名恵（NISHIOKA KANAE）
京都大学・教育学研究科・准教授
研究者番号：20322266

研究成果の概要（和文）：　本研究では，米英におけるパフォーマンス課題の実践に関する調査を行うとともに，日本の小学校・中学校・高等学校の協力を得て，開発研究を行った。第１に，各教科においてパフォーマンス課題に取り組む際に求められる思考力・判断力・表現力について，その具体的な内容を解明した。第２に，パフォーマンス課題に取り組む力を育成するための指導方法を開発した。子どもたちの論理的思考力を育成するための指導方法のほか，ウィギンズとマクタイの提案する「逆向き設計」とトムリンソンの提唱する「個に応じた指導」の組み合わせ方などについても検討した。第３に，パフォーマンス課題を活用するためのカリキュラム・マネジメントの在り方を解明した。長期的な指導計画（「マクロな設計」）の立て方を明らかにするとともに，複数の学校で評価基準や評価方法を共有する開発研究を行った。第４に，パフォーマンス課題を取り入れた入試改革の在り方について，イギリスの GCSE を参考にしつつ提案した。

研究成果の概要（英文）：　This study investigated instances of the application of performance tasks in the USA and England and conducted collaborative development research with elementary, junior high, and senior high schools in Japan. First, concrete details of students' ability to think, judge, and express their thoughts and judgments when engaging in performance tasks were clarified. Second, teaching methods were developed for performance tasks. For this purpose, methods to develop students' logical thinking ability as well as to integrate the ideas of "Understanding by Design," proposed by G. Wiggins and J. McTighe, and "differentiated instruction," advocated by A. Tomlinson, were examined. Third, a clear picture of curriculum management, which enables teachers to use performance tasks, was provided. It was discussed how long-term teaching plans ("macro design of a curriculum") could be developed, and ideas for several schools that were making efforts to share common assessment criteria and methods were proposed. Finally, a proposal on how entrance examinations could be reformed using performance tasks was put forth, based on certain ideas used for the GCSE in England.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	900,000	270,000	1,170,000
2010 年度	800,000	240,000	1,040,000
2011 年度	800,000	240,000	1,040,000
2012 年度	800,000	240,000	1,040,000
総　計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：　社会科学
科研費の分科・細目：　教育学・教育学
キーワード：教育評価，目標に準拠した評価，パフォーマンス評価，パフォーマンス課題，ルーブリック，カリキュラム，アメリカ合衆国，イギリス

１．研究開始当初の背景

パフォーマンス課題とは，複数の知識・技能を総合して使いこなす（活用する）ことを求めるような複雑な課題を意味している。平成 20 年 3 月に改訂された新しい学習指導要領の特色の一つとして，「学力の要素」に「知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等」を位置づけたことがあげられる（中央教育審議会「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）」2008 年 1 月 17 日）。そのような思考力・判断力・表現力の評価に最も適した評価方法は，パフォーマンス課題である。

日本においてはパフォーマンス課題に類する課題が学習課題として与えられてきた伝統があるものの，評価方法として位置づけ，定型化したものを共有するにはいたっていない。一方，英国においては 1980 年代末以降，資格試験においてパフォーマンス課題が多用されている。また米国においても 1990 年代末以降，パフォーマンス課題の開発と活用が広がっている。

研究代表者は，本研究開始以前も，英米における現地調査や日本の学校との共同研究に取り組む中で，教科と「総合的な学習の時間」におけるポートフォリオ評価法の活用，各教科におけるパフォーマンス課題の開発，およびその評価基準表であるルーブリックの開発について，大きな成果を上げてきた。

特にパフォーマンス課題については，ウィギンズ（G.Wiggins）とマクタイ（J.McTighe）が共著書『理解をもたらすカリキュラム設計（*Understanding by Design*）』（ASCD, 1998/2005）で提唱している「逆向き設計」論にもとづく開発研究に取り組んできた。「逆向き設計」論とは，教育目標・評価方法・指導過程を三位一体のものとして構想すること，また「理解（知識・技能を使いこなす力）」を身につけさせるためにパフォーマンス課題を含む様々な評価方法を用いることを提唱するカリキュラム編成論である。具体的には加西市立下里小学校において国語・社会・算数・理科の各教科について，また京都市立衣笠中学校おいて全教科のパフォーマンス課題を既に開発していた。共同研究に取り組んだ教師たちはパフォーマンス課題の開発方法を体得し，また児童・生徒たちの思考力・判断力・表現力を養う上でパフォーマンス課題を活用することが非常に有効であると指摘していた。

しかしながら一方で，パフォーマンス課題の効果的活用のためには，新たな課題も登場していた。具体的には，パフォーマンス課題において十分な思考力・判断力・表現力を発揮できない子どもたちへの指導や，効果的指導を行うための教師たちの力量形成であった。

２．研究の目的

研究開始当初の背景を踏まえ，本研究では次の三点の課題に焦点をあわせた。

(a) パフォーマンス課題に取り組む際に求められる思考力・判断力・表現力の解明
(b) パフォーマンス課題に取り組む力を育成する指導方法の開発
(c) パフォーマンス課題を活用する教師の力量形成を図るカリキュラム・マネジメントの実現

具体的には，日英米の国際比較調査と日本の学校における研究開発に取り組んだ。

３．研究の方法

(1) (a) パフォーマンス課題に求められる思考力・判断力・表現力，(b)パフォーマンス課題に取り組む力を育てる指導方法，(c)パフォーマンス課題を活用する教師の力量形成を図るカリキュラム・マネジメントに関して探究するため，日本の実践校におけるアクション・リサーチを実施した。

平成 21・22 年度は，京都府乙訓教育局における複数の小学校，金沢市立中央小学校，奈良女子大学附属小学校，向日市立西ノ岡中学校，福岡教育大学附属福岡中学校，京都府立園部高等学校などとの共同研究に取り組んだ。

平成 23 年度は，前年度に引き続き，奈良女子大学附属小学校，向日市立西ノ岡中学校，福岡教育大学附属福岡中学校，京都府立園部高等学校などとの共同研究に取り組んだ。さらに，乙訓地方中学校長会による乙訓スタンダードの開発への支援を始めた。

平成 24 年度も引き続き，研究協力校（宇都宮大学教育学部附属小学校，金沢市立中央小学校，京都府立園部高等学校など）との共同研究に取り組んだ。乙訓地方中学校長会との連携の下，乙訓スタンダードを生かして 8 中学校で学力評価計画を共有する取り組みを進めるとともに，思考力・判断力・表現力を育成するための課題や問題を分析した。さ

らに，京都府の Can-Do リスト作成研修会との連携のもと，京都府立西乙訓高等学校・山城高等学校・東宇治高等学校・東舞鶴高等学校において，英語科の長期的ルーブリックや課題の共有と改善を進めた。

（2）米英におけるパフォーマンス課題の実践に関して，調査を行った。特に米国については，パフォーマンス課題に対応する学力を身に着けさせるための指導方法（differentiated instruction, the art and science of teaching）や，パフォーマンス課題に組織的に取り組むための学校経営（differentiated school）に関して，文献資料や教員研修用 DVD などを収集・検討した。また，パフォーマンス課題を取り入れたカリキュラム設計の基本文献である，Wiggins, G., and McTighe, J., *Understending by Design* (Expanded 2nd Edition, ASCD, 2005）の翻訳作業を進め，翻訳書を刊行した。

また，英国においては，GCSE などの資格試験においてパフォーマンス課題がどのように取り入れられているかについての調査を進め，日本における入試改革への示唆を検討した。

４．研究成果

本研究を通して生み出された成果については，次の４点に整理することができる。

（1）各教科でパフォーマンス課題によって育成されるべき思考力・判断力・表現力について，具体的に明らかにすることができた。

本研究では，ウィギンズとマクタイの提唱する「逆向き設計」論に基づくパフォーマンス課題の開発を進めた。「逆向き設計」論においては，教科・単元を貫く「本質的な問い」（図１参照）に対応して「永続的理解」を明確にすることが提案されている。さらに，生徒自身が「本質的な問い」を問うような状況設定をすることによって，パフォーマンス課題を設計することとなる（表１参照）。

この時，「永続的理解」の内容として文章化される内容は，思考力・判断力・表現力の具体的な姿を目標として設定するものとなる。さらに，仮説的に文章化された「永続的理解」は，その課題に対応する特定課題ルーブリック（評価指標）を作成することを通して，検証される。この特定課題ルーブリックは，課題に取り組んだ生徒たちが生み出した作品をレベル別に分類し，それぞれのレベルに対応するパフォーマンスの特徴を記述することによって作成される（表２参照）。

本研究では，米英で開発されている課題例を参照しつつ，日本のカリキュラムにあった課題の開発に取り組み，その中で，各教科で育成されるべき「永続的理解」を明確にした。

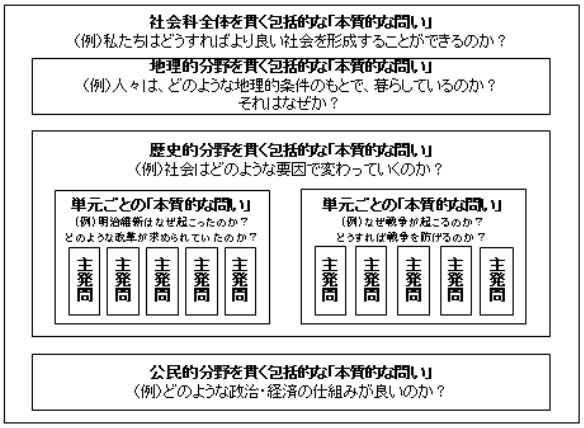

図１．「本質的な問い」の入れ子構造
（中学校社会科の場合）

表１．「本質的な問い」「永続的理解」と
パフォーマンス課題の対応（例）〔図書⑨〕

「本質的な問い」：なぜ戦争が起こるのか？　どうすれば戦争を防げるのか？
「永続的理解」：現代の二度に渡る世界大戦は帝国主義国家による植民地支配，民族至上主義による他民族迫害，世界恐慌からくる経済的な社会不安，仮想敵国を想定した同盟や条約などが複雑に結びついて起こり，現在の国際関係にも影響を及ぼしている。……
パフォーマンス課題「国際シンポジウムで提案しよう！」：「あなたは，平和を守るための調査や研究をしている政治学者です。ところが……第一次世界大戦，第二次世界大戦と規模が大きく犠牲者も多く出た戦争が二度にわたり起きたため，世界に向けて「なぜ戦争が起きるのか？どうすれば戦争が防げるのか？」について提言するレポートを作成することになりました。［模擬『国際シンポジウム』で意見交換したうえで，提言レポートを B4 用紙一枚にまとめてください。］」

表２．パフォーマンス課題「国際シンポジウムで提案しよう！」のルーブリック〔図書⑨〕

レベル５「すばらしい」：　なぜ戦争が起きるのかについて時代の流れと当時の状況を把握して最適な内容で具体的に語られている。 どうしたら平和を保てるかについて戦争の原因から導き出して関連づけて主張をしている。経済，民族・宗教，条約・同盟，政治など，複数の事がらを総合的に関連づけて主張をしている。主張に最適な資料やデータを用いて効果的に活用している。全体的に文章や流れがわかりやすく，事実の解釈の仕方が完全で，主張も強固で説得力がある。
レベル３「合格」：なぜ戦争が起きるのかについて時代の流れと当時の状況を把握した具体的な例が書かれている。戦争が起きる原因について経済，民族・宗教，条約・同盟，政治など，いずれかについて史実にもとづき　はっきりとした主張をしている。 どうしたら平和を保てるかについて主張している。ただし，主張に必要な具体的な資料やデータが少ないか扱い方がやや浅い。
レベル１「かなりの改善が必要」：事実が羅列されているだけになっていて主張がない。または未完成である。

特に中学校については，全教科においてパフォーマンス課題がどのように活用できるのかを示すような実践例を紹介する文献を共編著〔図書⑮〕として刊行し，その中で，生徒の作品も示しつつ，求められる思考力・判断力・表現力の具体像を示した。

（2）パフォーマンス課題に対応する効果的な指導方法を開発した。

「逆向き設計」論では，パフォーマンス課題に対応するために，指導の過程では，課題に向けての見通しを与えること，生徒を惹きつけること，課題に取り組むのに必要な知識・スキルを身につけさせること，やり直す機会を与えること，自己評価を促すこと，一人ひとりの習熟度や興味・関心に配慮すること，魅力的・効果的になるよう学習活動を配置することが重要だと指摘されている。

本研究では，学校の教師たちと共同で実践作りに取り組むことを通して，さらに具体的な指導方法を開発した。たとえば，課題に向けての動機づけを高める単元の導入，毎時間の授業内容をパフォーマンス課題と関連づけるためのワークシート，クラスでの討論会の組織の仕方，思考を整理するための板書，下書きと清書にあたってルーブリックやモデルを示すことといった工夫が生み出された。特に理科・社会科のパフォーマンス課題について，効果的な指導の在り方を事例に基づき説明する書籍を出版した〔図書⑨・⑩〕。

さらに，生徒たちの学力差に対応するための「個に応じた指導」についても，検討した。米国においては，「逆向き設計」論と，A.トムリンソンの提唱する「個に応じた指導（differentiated instruction）」論の統合について論じている文献が出版されている（Tomlinson, C., & McTighe, J., *Integrating Differentiated Instruction and Understanding by Design: Connecting Content and Kids,* ASCD, 2006）。そこでは，保障すべき「永続的理解」や「本質的な問い」については共通性を確保しつつ，パフォーマンス課題については個に応じたものにしても良いこと，さらに学習計画については個に応じたものにすべきことが論じられている。本研究では，日本における実践例を踏まえつつ，この主張の有効性を検証した〔雑誌論文②〕。

（3）パフォーマンス課題を取り入れたカリキュラムの「マクロな設計（長期的な指導計画）」の在り方について，明らかにすることができた。

「逆向き設計」論を踏まえると，包括的な「本質的な問い」（図１参照）に対応する類似の課題が繰り返し与えられる。この時，共通するルーブリックを用いて評価することにより，長期的な成長を捉えることができる。そのように単元を超えて用いられるルーブリックを長期的ルーブリックと言う（たとえば，表２に示したルーブリックに注目すると，下線部は，時代の変化を捉える他の論説文についても用いることができる評価基準となっている）。

このような「逆向き設計」論に基づくと，学力評価計画については，図２のように構想することができる。すなわち，観点に応じて適切な評価方法を選ぶ，それぞれの評価方法についてどの単元で与えるのか，どのような評価基準（ルーブリック・チェックリスト）で評価するのかを明確にする，という方式である。このような学力評価計画の立て方については，指導要録改訂期にあたり，現場の関心も高いものであり，各種の雑誌等で提案することができた〔雑誌論文⑧・⑨など〕。

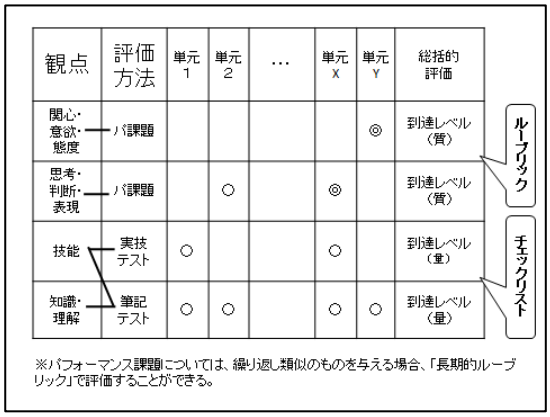

図２．学力評価計画の立て方のイメージ

さらに，乙訓地方の 8 中学校においては，校長会のリーダーシップのもと，学力評価計画を共有・改善する取り組みが始まっている。本研究では，その進め方についての支援も行い，成果の一端を学会にて報告した〔学会発表①〕。また，京都府立園部高等学校において開発した事例を踏まえつつ，現在，京都府立西乙訓高等学校・山城高等学校・東宇治高等学校・東舞鶴高等学校において，英語科の長期的ルーブリックや課題の共有と改善を進めている。本研究においては，その取り組みへの支援も行った。

（4）パフォーマンス課題を取り入れた入試改革の在り方について，イギリスの GCSE の例などを踏まえつつ，提案することができた。

具体的には，京都大学大学院教育学研究科教育実践コラボレーション・センター主催 E.FORUM 教育研究セミナーⅡ「高大接続・大学入試の課題と展望」(2012 年 12 月 8 日）において，イギリスの試験制度等を踏まえた提案「教育評価論から高大接続・大学入試を考える」を行った。

５．主な発表論文等
（研究代表者，研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 12 件）

① 西岡加名恵「パフォーマンス評価で思考力・判断力・表現力を育てよう」新潟大学教育学部附属新潟小学校『授業の研究 Fnet＋』第 184 号，査読無，2013 年 1 月，pp.2-3
② 西岡加名恵「教科教育におけるスタンダード開発の課題と展望――『逆向き設計』論からの提案」教育目標・評価学会『教育目標・評価学会紀要』第 22 号，査読有，2012 年 11 月，pp.35-42
③ 西岡加名恵「多面的な評価方法によって『自分と向き合える力』を付ける」Benesse 教育研究開発センター『VIEW21』（株）ベネッセコーポレーション　ベネッセ教育研究開発センター，2012Vol.2，査読無，2012 年 8 月，pp.22-25
④ 西岡加名恵「連載　思考力・判断力・表現力を育てるパフォーマンス課題（１）パフォーマンス課題と『本質的な問い』」日本教育評価研究会『指導と評価』，図書文化，査読無，2011 年 10 月号，pp.54-57
⑤ 西岡加名恵「パフォーマンス課題の位置づけとつくり方――『本質的な問い』の重要性」日本理科教育学会編『理科の教育』東洋館出版社，査読無，2011 年 9 月，pp.9-12
⑥ 西岡加名恵「『目標に準拠した評価』をめぐる疑問に答える――評価を充実させる八つのポイント」社団法人　日本教育会『日本教育』，査読無，2011 年 7 月号，Vol.402，pp.10-13
⑦ 西岡加名恵「『目標に準拠した評価』を充実させるための三つのポイント――パフォーマンス評価をどう実践するか」『現代教育科学』（No.651）明治図書，査読無，2010 年 12 月号，pp.8-10
⑧ 西岡加名恵「学力評価計画に対応するポートフォリオの活用」日本教育評価研究会『指導と評価』，図書文化，査読無，2010 年 10 月号，pp.8-11
⑨ 西岡加名恵「どのように学力評価計画を立てればよいのか？」日本理科教育学会編『理科の教育』（Vol.59, No.696）東洋館出版社，査読無，2010 年 7 月号，pp.14-17
⑩ 西岡加名恵「パフォーマンス評価の必要性」日本教育評価研究会『指導と評価』図書文化，査読無，2010 年 6 月号，pp.62-63
⑪ 西岡加名恵「小・中学校　PDCA サイクルに位置づける学習評価」『教職研修』No.454，教育開発研究所，査読無，2010 年 6 月号，pp.30-31
⑫ 西岡加名恵「新教育課程経営の評価・改善の進め方①～⑤」（連載）『別冊教職研修　学校管理職合格セミナー』教育開発研究所，査読無，2009 年 7～11 月号，pp.48-51

〔学会発表〕（計 3 件）

① 西岡加名恵，田中容子「パフォーマンス課題における共通性の保障と『個に応じた指導』――京都府立園部高等学校英語科の取り組み」日本教育方法学会第 48 回大会，一般研究発表（於　福井大学，2012 年 10 月 6 日）
② 西岡加名恵「大学教育におけるポートフォリオ評価法」京都大学高等教育研究開発推進センター　第 18 回大学教育研究フォーラム　小講演（於　京都大学吉田南構内 1 号館，2012 年 3 月 15 日）
③ 西岡加名恵「『目標に準拠した評価』の充実をどう図るか」教育目標・評価学会第 22 回大会，公開シンポジウム（於　奈良教育大学，2011 年 11 月 20 日）

〔図書〕（計 16 件）

① 西岡加名恵「学習の評価」篠原正典他編『新しい教育の方法と技術』ミネルヴァ書房，2012 年 5 月，pp.165-188（全 241 頁）
② 西岡加名恵「学習の評価・評定とその方法」安彦忠彦他編『よくわかる教育学原論』ミネルヴァ書房，2012 年 4 月，pp.124-125（全 248 頁）
③ G・ウィギンズ，J・マクタイ著，西岡加名恵訳『理解をもたらすカリキュラム設計――「逆向き設計」の理論と方法』日本標準，2012 年 4 月，全 434 頁
④ 赤沢真世・西岡加名恵・田中耕治「日本における教育課程の課題と展望」辻本雅史他編『東アジア新時代の日本の教育――中国との対話』京都大学学術出版会，2012 年 3 月，pp.101-118（全 370 頁）
⑤ Kanae NISHIOKA, “Educational Assessment and Lesson Study” in National Association for the Study of Educational Methods (ed.) *Lesson Study in Japan,* Keisuisha, 2011 (September), pp.354-366. （全 459 頁）
⑥ 西岡加名恵「新しい指導要録ってどこが変わったの？」「新しい学習評価と 4 観点ってどう見直されたの？」「評価規準の設定をどう行えばいいの？」教育開発研究所編『教育の最新事情がよくわかる本２』教育開発研究所，2011 年 6 月，pp.154-162（全 272 頁）

⑦ 西岡加名恵「指導要録改訂の方向性と今後の評価の在り方」田中耕治編『小学校新指導要録改訂のポイント』日本標準，2010 年 11 月，pp.8-23（全 223 頁）
⑧ 西岡加名恵「パフォーマンス評価の活用」小島宏・岩谷俊行編著『新しい学習評価のポイントと実践（第 3 巻）』ぎょうせい, 2010 年 10 月, pp.79-92（全 266 頁）
⑨ 三藤あさみ・西岡加名恵『パフォーマンス評価にどう取り組むか』日本標準，2010 年 7 月，pp.2-3（全 62 頁）
⑩ 堀哲夫・西岡加名恵『授業と評価をデザインする　理科』日本標準，2010 年 4 月，pp.28-47, pp.149-159, pp.160-162, pp.172-205（全 159 頁）
⑪ 西岡加名恵「教育評価」三宮真智子『教育心理学―心理学のポイント・シリーズ第 8 巻』学文社, 2010 年 4 月, pp.134-149（全 159 頁）
⑫ 田中耕治・西岡加名恵・赤沢真世「以学力問題為中心的改革　実践探索」主編 田慧生　（日）田中耕治, 執行主編　高峡『21 世紀的日本教育改革―中日学者的視点』教育科学出版社（中華人民共和国），2009 年 12 月，pp.50-78（全 339 頁）
⑬ 西岡加名恵「吉本均と学習集団づくり」田中耕治編『時代を拓いた教師たちⅡ――実践から教育を問い直す』日本標準，2009 年 10 月，pp.151-162（全 246 頁）
⑭ 西岡加名恵「教育評価と授業研究」日本教育方法学会編『日本の授業研究』（下巻）学文社，2009 年 9 月，pp.117-126（全 201 頁）
⑮ 西岡加名恵・田中耕治編著『「活用する力」を育てる授業と評価　中学校――パフォーマンス課題とルーブリックの提案』学事出版，2009 年 6 月，全 144 頁
⑯ 田中耕治・水原克敏・三石初雄・西岡加名恵『新しい時代の教育課程・改訂版』有斐閣，2009 年 4 月，全 341 頁

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）

○取得状況（計 0 件）

〔その他〕
ホームページ等
① 本研究に関連する用語解説のサイト
http://www.educ.kyoto-u.ac.jp/e-forum/kensyu_syokai/40/

６．研究組織
(1)研究代表者
西岡　加名恵（NISHIOKA KANAE）
京都大学・教育学研究科・准教授
研究者番号：20322266

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし